

【第17回年次大会 : 研究発表 要旨】

「ことばによる暴力」にみる大学生の恋愛とジェンダー

長安めぐみ

小林 陽子

若者は「恋愛に不活発」(渡辺 2010)と指摘される。一方で、「依存的な愛」(ニッキーシー 2000)にみられるような「恋人が誰かほかの人と楽しくやっているのではないかと考えるだけで自分がみじめになる」等の思いから、パートナーとの適正な距離が取りにくくなり、その結果「親密なパートナーの暴力(Intimate Partner Violence: IPV)」に至る危険がある。内閣府の調査(2014)では、交際相手から10~20歳代に受けた「心理的攻撃」は15.2%であり、この攻撃において「ことばによる暴力」は重要なファクターである。「ことばによる暴力」は、高圧的な言葉や態度から始まる暴力のことをさすが、単に「高圧的な」ばかりではなく、相手の落ち度を責める「愚痴」や貶めるような「悪口」であったりする。これらは、些細な一言が度重なり、攻撃の「ことば」に変容していくと思われる。その点では、身体的な暴力がエスカレートして重篤な命に係わる暴力に至る様相と重なっている。

本発表では「ことばによる暴力」に着目し、パートナー間のコミュニケーション(態度等非言語を含む)に潜む加害・被害の意識を読み解くために、以下の2点について検討した。

① 若者の恋愛とパートナーとの安全な距離

関東地方の大学生105名を対象に「大学生の恋愛観とこころに対する暴力」の質問紙調査(2016年4月)を実施した。調査項目は、ニッキーシー(2000)、沼崎(2006)による恋愛尺度・心への暴力尺度の項目を参考にし、基本属性、「恋愛観」に関する20項目、「親密な交際相手からの高圧的な言葉や態度を含む暴力」の経験に関する25項目であった。性別で集計したところ、男性が女性よりも暴力の被害を受けている傾向が見られた。

次に、恋愛観20項目を因子分析(主因子法・バリマックス回転)した結果、第1因子「恋人がいなくても別に寂しくない」など恋愛と距離を置く項目に高い因子負荷量を示した【恋愛客観型】($\alpha=.766$)、第2因子「恋人の声を聞かずにはいられない」「恋人の望むことならなんでもしてあげたいと思う」の【恋愛執着型】($\alpha=.690$)、第3因子「恋人は私を愛するように他の人を好きになることはできない」等の【恋愛思い込み型】($\alpha=.634$)が抽出された。因子ごとに各項目の得点の加算平均を算出し、性別で比較したところ、第2因子において男性の得点が女性よりも高いことが示された($p < .01$)。さらに回答者のうち、恋愛経験者77名(女性48名男性29名)を対象に、各因子得点を平均値で高低のグループに分け、暴力経験に関する25項目についてt検定を実施した。その結果、第2因子【恋愛執着型】にのみ8項目の有意差が認められた。【恋愛執着型】傾向が高いグループは42名(女性22名、男性20名)であり、恋愛経験のある女性の46%、男性の69%に相当する。有意差が見られた暴力経験は「友だちや知人の前で、恋人が私の欠点をあげつらったり馬鹿にしたりする」($p < .01$)、「恋人だったらこうあるべきといつも口うるさく言われる」($p < .05$)、「恋人に嫌われるのが嫌で言うことを聞いてしまう」($p < .001$)等であった。

男性が被害を受けていることについては、「大学生におけるデートDV加害及び被害経験と愛着の関係」(井ノ崎ら2011)において、「身体的被害の一部及び心理的被害経験数において男性の方が女性よりも多い」との知見があるが、その反面「男性が恋愛関係に親密さを強く求めると、暴力行使のリスクも高まる可能性がある」との指摘もある。【恋愛執着型】の男性の場合、被害の

側にいながら加害の側に転じる危険性も高いことが予想される。

② IPVにおける「ことばによる暴力」

「ことばによる暴力」への認識と実際の「デートDV(恋人からの暴力)」の被害経験について94名(予備調査の対象者を含む)に追加調査(2016年5月)を実施した。調査項目は、基本属性、交際経験の有無、「ことばによる暴力」への認識に関する16項目、被害経験に関する16項目(認識と同項目)である。結果を性別で比較したところ、交際経験のある58名(女性32名、男性26名)で、被害経験を1つでも選択した割合は、女性34%、男性23%であり、女性の方が多かった。

「ことばによる暴力」であると認識されていない割合が最も高い「黙っていたらわからないと怒る」は、最多の被害経験でもあり、それを選択したのは全て女性だった。また、男性は「馬鹿にしたりさげすんだりする」が最多の被害経験で、「言い訳するなと怒る」「悪口や欠点をあげてののしる」が続いた。女性は沈黙を強いられる一方、沈黙すると怒られ、そのことを両性共に暴力とは感じていない。女性は、男性を攻撃する際に、攻撃の「ことば」を用いてプライドを傷つけている。ここにはジェンダー間の非対称性が横たわっているように思われる。

今後は、親密な関係で起こる「ことばによる暴力」とジェンダーとの関連をスクリーニングできる質問紙の作成を通して、パートナーの「こころに対する暴力」に敏感な視点を持つための情報提供に繋げる。

[参考文献]

ジニー・ニッキャーシー&スー・ディビッドソン(2000)『夫・恋人の暴力から自由になるために』現代書館

内閣府(2014)「男女間における暴力に関する調査」

沼崎一郎(2006)『女子大生のための性教育とエンパワメント「ジェンダー論」の教え方ガイド』フェミックス

渡辺裕子(2010)「大学生における現代的恋愛の諸相(Ⅱ)－1990年代の調査との比較」『駿河台大学論叢』第41号105－129

(ながやす めぐみ・群馬大学講師)

(こばやし ようこ・群馬大学准教授)